

## 審査の結果の要旨

氏名 二井 昭佳

今後のわが国の都市やまちづくりにおいて、その基盤である地形、とくに山河をその基本に据えることは重要な観点である。地形をそれらのアイデンティティに組み込み直していくためには、人びとが地形の眺めをどのように価値づけてきたのかという知見をさらに蓄積していく必要がある。地形の眺め（以下、これを地景と呼ぶ）に関する研究には多数の取り組みがあるが、それらは借景庭園や眺望名所など、いずれも静的な視点に注目したものである。その一方で、動的な視点における地景の変化については従来ほとんど取り上げられていないのが現状である。しかし、地形に限らず、眺めの変化は、都市計画家などにより印象的な都市空間を形成するデザイン手法になり得ることが示唆されており、こうした観点から定量的な分析をおこなうことの意味は大きい。上記を踏まえて、本研究は、空間の分節や場所の意味づけにかかわる、動的な視点における地景の変化について論じたものである。それとともに、本研究では、その様々な地景に対する人々の見かたを地景の様相と呼び、山岳の地景では、主観的な捉え方が、どのような客観的な視覚情報に基づいているのかを明らかにすることも目指している。こうした観点は従来の研究にはみることができず、独自性の高い着眼点であるといえることができる。

第1章では、上に述べたような研究の視点を、視覚対象としての山岳の特異性、地景の変化に対する文人のまなざし、景観の変化と空間の関係性などから導いたうえで目的や方法について述べ、ついで、関連研究を整理するなかで本論文の位置付けを示している。

第2章では、地景の変化を考えるにあたっては、その透視形態のかたちに注目することは意味を持たず、変化のしかたに注目する必要があることを指摘している。そのうえで、地性線に見立てた線分や単純な山岳モデルの透視形態の変化をCGによる三次元モデルを用いてその特徴をまとめている。加えて、山岳の斜面が鉛直方向の傾きだけではなく水平方向の傾きも知覚することが難しいことを導き、斜面のかたちは主観的なかたちの捉え方に依存する可能性を指摘している。これらの結果をもとに、山岳の地景の変化を、その透視形態の構成要素の変化に注目して3つに分類できることを示している。具体的には、①構成要素が維持される変化「地景の持続」と、②構成要素自体も変わる変化「地景の変移」に分け、①はその可視量の変化の有無から、さらに(a)歪みの持続、(b)関係の持続に分けている。この分類にしたがって、透視形態に基づく視点の領域の考え方を提示している。

第3章では、視点が山岳に対して側方へ移動する場合の地景の変化を考えるために、海図に記載されている山アテにかかわる海上地名「～出シ」を分析対象としている。山アテ

は、アテ山と呼ばれる視距離の異なるふたつの山岳を利用して行われることが知られている。そこで、「～出シ」とその周辺におけるアテ山の地景の変化に注目し、アテ山の地景の持続領域と、漁場に深くかかわる海底隆起部の位置関係について考察している。その結果、「～出シ」によって決められる海上の領域は、アテ山の地景の変移に挟まれた地景の持続領域に相当し、この領域は、目視できないが集魚効果の高い海底隆起部とおおむね対応することを示している。このことから、アテ山の地景の持続領域に対して、漁場という意味づけがなされていることを指摘している。さらに、この持続領域の大きさは、海底隆起部の大きさに依存しないことから、変化の体験時間に閾値が存在する可能性も指摘している。

第4章では、視点が山岳に対して前方に移動する場合の地景の変化を考えるために、神体山をもつ神社の参道を分析対象としている。神社の参道は俗域から聖域へのアプローチとして計画的につくられていることが知られており、神体山を持つ神社では神体山の地景が参道に影響を与えている可能性が高い。そこで、まず神体山の地景の持続領域を算出し、その領域と参道・鳥居の位置関係について考察している。その結果、神体山をもつ神社参道における地景の変化の特徴を次のようにまとめている。まず、参道は複数の地景の持続領域を横断しているか、もしくは参道がひとつの持続領域におさまる場合にはその終点が地景の変移点に相当し、その変移点と二の鳥居の位置がおおむね対応している。このことから、神体山の地景の変移を標示するように、二の鳥居が設置されている可能性があることを指摘している。さらに、両端に鳥居が配置されている地景の持続領域の幅が一定以下の距離になることから、変化の体験時間には閾値が存在する可能性も指摘している。

第5章では、3章と4章で得られた結果を共通点と相違点に分けて考察し、注目される可能性の高い地景の変化の特徴を提示している。さらに、その結果を、2章で提示した山岳の透視形態に基づく視点領域と対照させながら、地景の持続領域と眺望地点の関係について考察を試みている。その結果、注目される可能性の高い地景の変化の特徴を大きく以下の2点にまとめている。それは、①地景の変化が、地景の変移を含む地景の関係の持続領域に対応していること。②その領域が、時間にして数分の間に①が体験される大きさであることである。これらを満たす上で、その目的が空間の分節の場合には地景の変移、場所の意味づけの場合には地景の持続領域が活用されるとしている。

また、注目されている地景の変化が、地景の持続のなかでもおおむね関係の持続に対応していることと2章の考察を踏まえて、歪みの持続の場合にはひとつの透視形態が代表景として認識される可能性を指摘している。

以上概観したように、本研究の最も評価すべき点は次の二点である。第一に、注目される可能性の高い地景の変化の特徴をまとめ、地景の変移論として提示している点、第二に、山岳における客観的な視覚情報と主観的な捉え方の関係についての手がかりを提示している点である。こうしたアプローチは、既存の地景に関する研究には見ることができない、独自性の高い視点であると結論付けることができる。よって、本論文は、博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。